

# 副教材としての新聞活用と 教師の力量形成

長野県新聞活用教育推進協議会長  
信州大学教育学部教授

土井 進



本協議会の会長を10年お務めになった渋谷文隆・前会長（現・帝京大学教職大学院教授）と私は、1980（昭和55）年に開催された第13回全国中学校社会科教育研究大会・東京大会で、渋谷前会長は筑波大学附属中学校で小中高一貫の研究授業、私は文京区立第五中学校（現・音羽中学校）で歴史的分野の研究授業を担当させていただいた。それ以来のご縁が重なり、私が本協議会長の重責を担うことになって2年目を迎えている。

昨年度、小中学校5校のN I E 授業を参観する機会を得た。それぞれの授業者が「新聞記事から得た情報を切り取ってみんなで共有し、自分の見方・考え方を深める力を育む」「見出しや新聞記事を書き、見出しの根拠を発表することによって時代の特色をつかませる」「新聞を教育に活用することは、直接体験に次ぐ質の高い疑似体験ができる。映像資料とは異なり、その背景にある情景を読み取りながら自分事として感じていく効用がある」など、それぞれの教材観に基づき児童生徒が主体的に学ぶ授業を展開されていた。

昭和天皇の侍従次長、木下道雄先生のかばん持ちをされ晩年に周禮研究会を1200回主宰された高田豊寿先生（1912－1989）に師事し、私は200回先生の警咳（けいがい）に接することができた。その中で先生は厳しい指導をされた。「自分の部屋で一人本を読んでいて勉強だと思っているようではダメだ。足を運んで、その道の人から聞いてくることが大事だ。そして、それを報告する場をもっていないと、聞き方がしっかりしない。『どこの〇〇さんに聞いてみる』というやり方で訓練されていくと、世の中の歩き方がだんだんとできてくるものだ。海軍のことは海軍の大將に、銀行のことは頭取にとそれぞれの分野のことが身についている人、足跡上の皮をかぶった人の話でなければ身にしみない。生徒を引きずり回して教えねば本当のものはわからない。教師がみんなわかったような顔をして教科書をいくら隅から隅までひもといて社会科をやってもダメである。実際の場合を踏むことが大切なのだ」と。（『東郷』通巻189号）

この教えを肝に銘じて授業づくりに取り組んでいる。東京都北区立飛鳥中学校での「陸奥宗光と条約改正」の授業では、陸奥外務大臣の邸宅があった都立旧古河庭園に生徒を引率した。そこで次の時事新報（明治30年8月26日）の記事を提示した。「陸奥伯の葬儀は、来る28日午後2時、王子西ヶ原自邸出棺、本郷駒込追分町通りより帝国大学前に出て、切通しより上野山下通りを経、浅草松葉町海禅寺に至り、いと荘厳なる仏式を以って葬儀執行。終わりにて日暮里火葬場にて北邸一片の煙となし、遺骨を埋葬することに決定せり」。この記事に出会った生徒は、陸奥外務大臣が間違いなくこの北区西ヶ原に住んでいたことを納得したのである。

大学生が意欲的に生活科の授業づくりに取り組む力をつけるには、私が一介の小作人となって農作業を始めることが最も学生のためになると考えて、長野市茂菅地区の休耕田4aと畑8aを開墾して14年目を迎えた。この授業のまとめは「茂菅農場新聞づくり」である。「土づくりと畝づくり」「アレチウリ危機」「干し柿と人間形成」などの見出しが踊っている。教師が新聞を副教材として活用し、児童生徒に新聞づくりをさせてみることによって、思考力・判断力・表現力、そして仲間との絆が深まることは請け合いである。